

聖書日課 『からし種』 2020.6.14-6.21

<p>6月14日 (日)</p> <p>ネヘミヤ記 11章</p>	<p>「他のイスラエルの人々、祭司、レビ人は、ユダのすべての町で、それぞれ自分の嗣業をもって住んだ」(20節)。イスラエルの民は、聖なる都エルサレムに住む者、他の町に住む者に分かれていた。しかし、神の民として自分が託された土地でそれぞれが託された仕事を行っていった。都に住む者も、町や村に住む者も同じように主の祝福が注がれていた。</p>
<p>15日 (月)</p> <p>ネヘミヤ記 12章</p>	<p>「ダビデとアサフがいた昔の時代のように、詠唱者の頭がいて、神への賛美と感謝の歌をつかさどった」(46節)。イスラエルの民が、エルサレム、その周りの町々に帰還した後の礼拝は、神への賛美と感謝の歌がささげられていた。捕囚という大きな試練を超えて、それでも神への賛美を続けたイスラエルの姿から、わたしたちの礼拝への姿勢を示される。</p>
<p>16日 (火)</p> <p>ネヘミヤ記 13章</p>	<p>「人々はこの教えを聞くと、混血の者を皆、イスラエルから切り離した」(3節)。ネヘミヤの改革は、モーセの書に従って一度は共同体に迎え入れた異邦の民、混血の民を、イスラエルから切り離し、また安息日を守るための環境を整えるものだった。主は共同体を整えるため、ネヘミヤのように行うことをのぞんでおられるのだろうか。</p>
<p>17日 (水)</p> <p>エステル記 1章</p>	<p>「お出しになった勅令がこの大国の津々浦々に聞こえますと、女たちは皆、身分のいかんにかかわらず夫を敬うようになりましょう」(20節)。聖書の時代にも、性別だけでなく、様々な属性による圧力が行われていたことがわかる。自分の思い通りに動かない存在を、排除していく力が今大きくなっている。主の知恵に聞き、歩みたい。</p>

<p>18日 (木)</p> <p>エステル記 2章</p>	<p>「王は盛大な祝宴を催して、大臣、家臣をことごとく招いた。…王は諸州に対し免税を布告し、王の寛大さを示すにふさわしい祝いの品を与えた」(18節)。王は自分の力と存在を示すために、ワシュティ、そしてエステルを利用した。「モノ」として存在していた女性たちとそれを管理する男性たちの物語を通して、主は何を語ろうとしているのだろうか</p>
<p>19日 (金)</p> <p>エステル記 3章</p>	<p>「モルデカイ一人を打つだけでは不十分だと思い…モルデカイの民、ユダヤ人を皆、滅ぼそうとした」(6節)。ハマンは自分になびかないモルデカイに復讐するために、反抗する者への見せしめとして各州のユダヤ人を絶滅させようとした。モルデカイの苦しみと葛藤はどんなに大きなものだったのだろうか。現代の私たちは、どのように生きるべきだろうか</p>
<p>20日 (土)</p> <p>エステル記 4章</p>	<p>「スサ…のユダヤ人を集め、三日三晩断食…してください。…このために死ななければならぬのでしたら、死ぬ覚悟しております」(16節)。エステルは自分の友の痛みと共に苦しむし、死を覚悟して、友の命を守るために行動しようとした。共に祈りを合わせる友がいることがエステルを奮い立たせたのだろうか。私たちの祈りを結び合わせてくださる主に感謝して。</p>
<p>21日 (日)</p> <p>エステル記 5章</p>	<p>「彼(ハマン)は、自分のすばらしい財産と大勢の息子について、また王から賜った栄誉…自分の栄進についても余すところなく語り聞かせた」(11節)。この二日後に彼を待ち受けている運命を知らずに有頂天になるハマン。権力を追求し神を畏れることを忘れた人間の愚かさが示されていく。今日、各人に注がれている神の慈しみを心から感謝し礼拝をささげよう。</p>